

ICTを活用した障害のある児童生徒等に対する指導の充実
(企業等と連携したICT人材育成のための指導の在り方に関する調査研究)
成果報告書

受託団体名

兵庫県教育委員会

1. 事業の実績

(1) 事業の目的・目標

事業の目的

- ①ICT活用による障害者雇用の実績のある企業と連携し、遠隔システムを活用した在宅ワークや、AI技術（分身ロボット）等で接客を進めるなどの実習を通して、Society5.0時代を生きる生徒の可能性を探り、障害特性を補ったり、仕事の切り出し等を行ったりすることによる就労や社会参加の機会を拡充する。また、障害のある生徒等に対する新しい働き方を踏まえた進路選択及び指導や支援の在り方を、専門家等を交え検討する。
- ②教員が、在宅就労者との座談会や、雇用する企業関係者から支援のポイントに関する講義、ICTを活用した際に求められるコミュニケーションスキルに関するワークショップを経験することにより障害のある子どもへのキャリア教育に関する指導力の向上を図る。
- ③障害者雇用の促進やICT活用による在宅ワーク拡充に向けては、社会の理解が欠かせないため、生徒や当事者等の実体験に基づく声を広く発信したり、障害特性についての理解を促すポスターを企業と連携して作成したりして広報することで、障害者理解の促進を図る。

事業の目標

研究を進める際の目標として、次の4点を挙げる。

- ①ICT活用に積極的に取り組む企業等と連携し、特別支援学校の生徒が在宅ワークによる就労体験実習（年間複数回実施予定）や、分身ロボットを活用した遠隔での接客実習を通して、その知識や技能等を学ぶとともに、その様子を広く県民や企業関係者、福祉事業者に周知することで、新しい働き方として、生徒の卒業後の進路選択の可能性を広げる。
- ②中小企業家同友会等の経済団体と連携・協力し、特別支援学校の専門性を生かした業務内容の切り出しやICTを活用した環境整備などの工夫について検討する機会を設ける。
- ③検討委員会の企業関係者が、兵庫県特別支援学校技能検定（パソコン部門）の指導に取り組む学校等を訪問し、指導内容や方法だけでなく、ICTを積極的に活用する上での情報モラルに関する内容も踏まえた助言を行うことで、教員が生徒の発達段階に応じたキャリア教育を意識し、生徒の卒業後を見据え、見通しをもって指導力の向上につなげる。

④特別支援学校の生徒が学校での学びや、将来の夢や希望を学校以外の場所で社会に向けて発信する機会をつくり、より体験的な学びができるよう取り組む。具体的には、生徒がプレゼンテーションソフト等を使って自分の思いや将来の夢を語る資料を作成したり、視覚障害や聴覚障害に対する情報保障等にICTを活用したりして、発表する機会として「キャリア教育甲子園」を企画・開催し、学校関係者以外にも取組を周知する。また、広報に関しては、企業と連携してポスターを作成し、公共施設等に掲示したり、特別支援学校のキャリア教育の取組、社会で活躍する卒業生の姿を掲載したリーフレット等を作成し、SNS等を活用して発信したりすることで、社会に対してより一層の理解促進を図る。

(2) 研究協力機関・校の一覧

(ふりがな) 学校名	障害種	具体的な役割
【令和5年度・6年度】 (ひょうごけんりつわだやま とくべつしえんがっこう) 兵庫県立和田山特別支援学校	知的障害・ 肢体不自由	・ 検討会議委員として検討会議に参加。 ・ 企業等と連携した在宅ワークにおける「しごと体験会」に係る調整担当。 ・ 中小企業家同友会と連携した「しごと体験会」実施校。 ・ 令和5年度特別支援学校キャリア教育・就労支援等研究協議会会場校として進路指導部の実践事例を発表。 ・ 「キャリア教育甲子園」プレ開催会場校。在籍生徒2名参加。
【令和5年度・6年度】 (ひょうごけんりつはりま とくべつしえんがっこう) 兵庫県立播磨特別支援学校	知的障害・ 肢体不自由	・ 検討会議委員として検討会議に参加。 ・ 企業等と連携した在宅ワークにおける「しごと体験会」に研究指定校として参加。 ・ 卒業生による「進路学習会」実施校。卒業生及び保護者を講師として講演及び座談会を実施。 ・ 「キャリア教育甲子園」プレ開催に際し、在籍生徒2名オンラインで参加。
【令和5年度・6年度】 (ひょうごけんりつひかみ とくべつしえんがっこう) 兵庫県立氷上特別支援学校	知的障害	・ 検討会議委員として検討会議に参加。 ・ 企業等と連携した在宅ワークにおける「しごと体験会」に研究指定校として参加。 ・ 兵庫県教育委員会でICTを活用した指導・支援に卓越した指導実績のある教員として認定を受けた、「HYOGO スクールエバンジェリスト」所属校(今年度の検討会議委員も兼任)として、先進事例の紹介及び学校におけるICTを活用した指導の工夫について校内研修を実施。 ・ 「キャリア教育甲子園」プレ開催会場校。在籍生徒1名参加。

(3) 取組内容

ア 県教育委員会の取組

(ア) 企業等と連携したICT人材育成のための指導の在り方に関する検討会議

遠隔システムを活用した就労支援、効果的な指導と企業連携の在り方、情報モラルや望ましい情報活用、企業等と連携した障害者理解につながる取組等の検討

(検討会議委員一覧)

	分 野	名 前	所属・役職等
1	学識経験者	小川 修史	兵庫教育大学大学院・准教授
2	学識経験者	西田 裕明	川崎医療福祉大学・講師
3	企業関係者	高谷 和典	JR 西日本あいウィル・総務部システム課長 (ジョブコーチ)
4	企業関係者	横峯 純	JR 西日本あいウィル・総務部企画課副課長 (公認心理士)
5	企業関係者	岡崎 正洋	(株)スタッフサービス・クラウドワーク シニアアドバイザー
6	企業関係者	柴 宏幸	(株)スタッフサービス・クラウドワーク マネジャー (精神保健福祉士)
7	学校関係者	高橋 幹夫	兵庫県立特別支援学校長会・会長 (県立いなみ野特別支援学校・校長)
8	学校関係者	西岡 敬生	兵庫県立和田山特別支援学校・教諭
9	学校関係者	菅原 美希	兵庫県立播磨特別支援学校・教諭
10	学校関係者	濱田 哲平	兵庫県立氷上特別支援学校・教諭 (HYOGO スクールエバンジェリスト)
11	行政関係者	篠井 省吾	兵庫県産業労働部能力開発課・課長
12	保護者代表	杉田 朋子	兵庫県特別支援学校PTA連合協議会・会長
13	保護者代表	井上三枝子	公益財団法人兵庫県手をつなぐ育成会・理事長

実施時期	実施内容
令和5年7月21日(金) 【第1回：対面】	【報告】 ・ 事業説明及び今年度の取組について 【協議】 ・ 障害のある児童生徒が自己の思いや考えを表出できるようなICTを活用した取組、指導の在り方 【協議のポイント（企業側から）】 ・ ICTを活用することで、特別支援学校の生徒の就労が広がる可

	能性がある。 ・不登校の生徒に関して、ICTを活用することでコミュニケーションがとれる、就労できる力があれば在宅での就労の可能性が広がる等、卒業後の社会とのつながりを保つことができる可能性も秘めているのではないか。 ・自分の考えをオンライン上で言葉で相手に伝えることは非常にレベルの高い手段であり、対面であってもオンラインであっても、就労に向けて自己発信力が非常に必要であるため、自己発信力やコミュニケーションスキル向上のための取組が必要である。
令和5年9月22日（金） 【第2回：対面】	【報告】 ・在宅就労者の職場訪問の報告 【協議】 ・障害特性や特別支援教育について広く理解啓発を促す広報とは【協議のポイント（企業側から）】 ・「在宅就労＝家から出ることがないため孤独」というイメージを抱きがちであったが、実際に当事者や企業関係者からの生の声を聞くことでイメージが変わった。学校現場や保護者も含め、在宅就労（通勤型にとらわれない就労）についてもっと周知する必要がある。 ・広報については、当事者の生の声が届くような工夫が必要である。多くの情報があり過ぎると本質が伝わらないので、留意する必要がある。 ・写真やQRコード等も活用し、ポスター自体はシンプルにメッセージ性があるものにするといよい。
令和6年2月6日（火） 【第3回：オンライン】	【報告】 ・県及び研究指定校の取組及び、県外視察の報告 【協議】 ・子どもたちの「なりたい自分」の実現に向けたICTの有効な活用 【協議のポイント（企業側から）】 ・知的障害のある生徒や、障害の程度が重度の場合であっても、子どもができないことをそのままにせず、教員側の教え方や、ICTをどう活用するかという工夫が学校にも企業にも一層求められている。 ・次年度は、ICTを活用した在宅ワーク等の新しい働き方の体験をより多くの特別支援学校に広げていくだけでなく、「なりたい自分」になるために、特別支援学校の各段階において、学校でどのようにICTを活用すれば高い教育効果が得られるのか研究指定校を中心に取り組み、その成果をリーフレット（デジタル版）として作成し、情報を共有していくことが重要である。

(イ) 在宅就労者の職場（自宅）訪問及び教員研修

令和5年8月29日（火）

【目的】

在宅就労している当事者の職場（自宅）を訪問し、実際の仕事の様子を見学、本人、保護者及び企業担当者からの話（在宅就労で必要なスキルやコミュニケーションの図り方等について）を聞くことで、多様な進路実現及び必要なスキル習得に関する教員の学び、指導力の向上を図る。

【開催場所】

在宅就労当事者自宅（神戸市須磨区）

【訪問人数】

7名（企業担当者2名、研究指定校教員3名、事務局2名）

【内容】

・仕事の様子の見学、本人、保護者、企業担当者との話

【本人から】

・大学時代の就職活動で周りが就職を早々に決めていく中で、自分自身も障害者対象の公務員試験や就職活動をしたが不合格となり、辛い思いをした。

・大学卒業前に就労移行支援事業所の利用を提案され、通うことになり、利用数ヶ月後に現在の会社の存在を知り、チャレンジしてみようという気持ちになった。

・在宅業務で留意していることは、分からないことは上司にチャットで確認することも含め、日常的に teams を活用している。メールの書き方、名刺の渡し方は在学中に知っておきたかった。

【保護者から】

・「完全在宅での就労」と聞き当初は「孤立」のイメージが強かったが、会社紹介の動画を見ることでイメージをつかむことができた。

・実際に働いている様子を見ると、オンラインでミーティングやクラブ活動もあるなど、孤独ではないことが理解できた。何よりも、オンラインでのやり取りを通して、本人のコミュニケーション能力が非常に高まった。

【企業から】

・在宅での仕事は孤独のイメージがあるが、実際はそのようなことはなく、定期的にオンラインを活用してミーティングや雑談する時間を取ることを大切にしている。

(ウ) キャリア教育甲子園プレ実施に向けた企業イベントの見学

令和5年10月7日（土）	【目的】 キャリア教育甲子園プレ実施に向け、実際の企業における取組発表イベントの様子を見学及び企業関係者から直接話を聞くことで、具体的イメージを明確にする。 【視察先】 株式会社JR西日本あいウィル（兵庫県尼崎市） 【参加人数】 4名（事務局） 【見学内容】 企業関係者及び一般県民を対象とした「お客様感謝デー」において、企業の部署毎に仕事内容を来場者に紹介したり、仕事内容を体験してもらったりする、企業広報・社会貢献活動。焼きそばやジュース、綿菓子等の軽食を販売するブースも設置。 社員が自分の仕事のことや、夢や希望を全体の前で発表するイベントを、本事業のキャリア教育甲子園の参考とする予定であったが、コロナの影響もあり、今年度は実施されず。
--------------	---

(エ) 先進校等県外視察

令和5年10月24日（火）	【目的】 ICTを活用した先進的な取組を実施している学校等を視察し、本県での取組に係る知見を養う。 【視察先】 分身ロボットカフェDAWN in Hiroshima（広島県広島市） 【参加人数】 7名（研究指定校3名、事務局4名） 【視察内容】 分身ロボット「OriHime」「OriHime-D」を遠隔で操作するパイロット（分身ロボットを遠隔により操作し、接客を担当する人）による、カフェにおける接客体験。客は卓上の「OriHime」と対話しながら、軽食を楽しむほか、実際のロボットの操作も体験可能。 【参加教員等の感想】 ・会話のやり取りが非常にスムーズで、まるでその場において接客を受けているような感覚がある。 ・音声入力も自分の声以外に読み上げソフト等も活用できるので、声を出すことに抵抗のある生徒でも活用が可能になると考える。
---------------	---

(オ) キャリア教育・就労支援等研究協議会の開催

令和5年12月14日（木）	【目的】 キャリア教育に先進的に取り組む学校の実践発表や協議を通し、各校において組織的かつ計画的にキャリア教育の充実を図るとともに、在学中からの関係機関との連携に関する好事例を発信、共有する。また令和5年度については、ICTを活用した実践発表の場として、本会の中で「キャリア教育甲子園」をプレ開催する。 【開催方法】 兵庫県立和田山特別支援学校（会場）及び各所属におけるオンライン参加 ※特別支援学校就職支援推進会議委員から指導助言者として会場参加 【参加人数】 会場参加及びオンライン含め約130名 【実施内容】 行政説明、キャリア教育甲子園プレ開催、県立特別支援学校進路指導担当者による実践発表
---------------	---

(カ) キャリア教育甲子園（仮称）のプレ開催

令和5年12月14日（木）	【目的】 障害のある生徒が、PowerPoint等のプレゼンテーションソフトを活用し、各校でのキャリア教育に関する学習活動を経験して成長したことや、自分自身の将来の夢や目標を発表する。 【会場校】 兵庫県立和田山特別支援学校 【参加人数】 研究指定校より6名（会場参加2名、自校からオンラインによる参加4名） 【内容】 兵庫県特別支援学校技能検定や現場実習での取組を通じて自分自身が学んだことや、将来の夢を発表し、質疑応答、有識者等から助言をもらう。オンラインの参加者からはチャットを活用して感想を即時に入力してもらった。
---------------	---

イ 研究協力校の取組

(ア) 企業等と連携したICTを活用した在宅ワークに関する「しごと体験会」の実施

令和5年7月13日(木) 【第1回】	【目的】 在宅ワークに先進的に取り組む企業と連携し、今後の新しい働き方の一つである「在宅ワーク」の実際の仕事内容を生徒が体験することで、将来の進路選択について具体的なイメージが持てるようにする。
令和5年11月30日(木) 【第2回】	【参加人数】 第1回：9人（うち2人中学部） 第2回：14人（うち2人中学部） 【取組内容】 ・ 中学部：オンラインでのコミュニケーション体験 在宅社員、高等部の先輩とのコミュニケーション交流 ・ 高等部：エクセルを使用した実際の作業体験 在宅勤務社員本人、他校の生徒とのコミュニケーション交流 【感想等】 (生徒) ・ どうやって伝えるかを考えながら質問するのが難しかった。 ・ 人見知りで緊張して話せないなので、体験会にはもう参加したくない。 ・ また参加したい。 (教員) ・ 生徒が自己発信できるような支援についてより考えるようになった。 ・ 知的障害のある生徒がどこまで仕事としてリモートでできるのか、可能性をもっと探りたい。 ・ 在宅ワークのイメージが前向きになり、今すぐではなくても、将来の選択肢の一つとして生徒に提示できると感じた。

(イ) 企業等（中小企業家同友会）と連携した対面による「しごと体験会」の実施

令和5年9月28日(木)	【目的】 中小企業家同友会と連携し、各仕事における業務の切り出しや、切り出した業務を実際に生徒が体験するとともに、企業側は障害者雇用に関するヒントを得る。 【実施会場】 兵庫県立和田山特別支援学校 【参加人数】 参加企業8企業（うち1企業はオンラインで参加）
--------------	---

	参加生徒25名（高等部・中学部） 見学者約40名 【内容】 但馬地域を中心に、実際に障害者雇用の実績がある、もしくは今後雇用を考えている中小企業が、会場校に各社ブースを設置し、自社の仕事内容を生徒達に説明、紹介する。生徒達は事前に紹介されている内容を基に、自分たちの興味がある会社のブースを回り、仕事内容の説明を受けた上で実際に体験する。 【成果等】 参加した生徒たちからは、概ね楽しかったとの感想を聞くことができた。参加企業においては、特別支援学校とはどのような子ども達が通学する学校なのか、また、実際の業務内容から、障害のある子どもたちでもできるような業務の切り出し等について事前に会場校の担当者と打合せをしたことで、当日双方が戸惑うことなく参加することができていた。	
(ウ) 企業等におけるICTを活用した実習※R5は研究指定校3校中2校で実施		
ICTを活用した職場実習を実施し、その成果と課題から学校における指導に生かす。		
【兵庫県立播磨特別支援学校】		
実施時期・実施場所	内容等	
(時期) 令和5年10月 5日(木)～12日(木) (土日除く5日間) (場所) 兵庫県立はりま姫路 総合教育センター	【内容】 ・パソコンを使用した事務補助（入力）作業 (実施に当たっての工夫) ・肢体不自由に加えて弱視を併せ有する生徒であったが、教員も生徒も支援機器についての知識がなかったため、県立視覚特別支援学校に協力を依頼し、パソコン内に標準搭載されている機能や拡大機器を紹介してもらい、実際に見て触り、実習までに授業でも活用して慣れておくようにした。また実習先にも事前に情報提供しておくことで、スムーズな実習を実施することができた。 【成果と課題】 ・生徒自身が支援機器やパソコンの機能を知り、活用することで、身体への負担が減少し、活用前と比較すると作業スピードが向上した。また、作業が効率的にできるようになったことで、「もっとスキルアップしたい」という意欲の向上にもつながった。 ・ICT機器についての知識は教員の個人の力量によることが多く、「知らない」ために「効果的な指導につながらない」こともある。教員自身も多くの知識を身につけ、情報をキャッチするために意識を高くもつこと、専門性の高い教員や学校等の横の連携を図っていくことが重要である。	

【兵庫県立和田山特別支援学校】

実施時期・実施場所	内容等
(時期) 令和5年11月13日 (月)～17日(金) (場所) 株式会社JR西日本あ いウィル 豊岡市役所健康福祉 部社会福祉課	【内容】 ・パソコンを使用した事務補助（入力）作業（実施に当たっての工夫） ・現場実習においてICT機器を扱う内容を事前に事業所と打合せをし、実習前に学校で個別指導を実施した。 ・ICTの活用により進路選択の可能性が広がることや、取り扱う中身（データ）が非常に機密性の高いものであることも踏まえ、情報モラルに関する指導と関連づけて学習した。 【成果と課題】 ・学校と異なる環境下での実習であったため、必要以上に身体に緊張が入り、初日は日頃のパフォーマンスが発揮できなかったが、徐々に緊張が解け、リラックスしながら業務が行えるようになった。また、ICT機器操作のスキルを身につけることで、社会で活躍できることが実習を通して体験的に感じさせることができた。 ・教員にとっても、実習では生徒に常時対応できる状態ではないため、事前に援助依頼の方法等、解決のためのコミュニケーションの必要性を教員自身も理解して指導することができた。 ・学校でICT機器を実際に操作する時間の更なる拡充が必要であることに加え、タブレット端末のタッチ操作だけでなく、生徒の障害の程度に応じてキーボード入力等の操作についての指導を早い段階から積み重ねる必要がある。

(エ) 職員を対象としたICTを活用した校内研修

研究指定校の教員が先進事例等を見学した内容を基に校内研修の講師となり、自校職員へ内容を伝達することで、他の職員のICT活用に対する意識の改革や実践力の向上を図る。

【兵庫県立和田山特別支援学校】

実施時期・実施場所	内容等
令和5年4月 9月 11月 2月 いずれも校内研修として自校で実施	【内容】 年間を通じ、職員のICT技術向上に係る研修として、自由参加で実施した（テレワーク兵庫（在宅ワーク）の設定と活用、校内におけるGoogleフォームの活用方法、業務効率を上げるTo doリストの作成方法について、情報モラル及び情報セキュリティの扱いについて、Teamsの活用）。 【成果と課題】 ・研修実施前は、「言葉は知っているが、具体的な活用場面や方法が分からない」等、ICTに関する知識、技能に教員間で差があったが、研修後はそれぞれのアカウントの使用機会が増え、全体的な業務の効

	率化につながるとともに、校内でクラウドに保存した情報（教材等）を、授業内で端末を活用して使用することができるようになり、教員の授業力の向上につながった。 ・学校現場においては、ICT活用自体に苦手意識を抱く教員や、従来の確立された方法の方が良いと考える職員もいるため、より多くの人に受け入れてもらえるような提案方法を工夫する必要がある。 【教員の感想】 ・校内での活用方法について研修があったので理解できて良かった。 ・アンケート作成の効率的な方法が分かった。 ・使い方を知ると便利なのが分かったので、今後活用したい。
--	---

【兵庫県立氷上特別支援学校】

実施時期・実施場所	内容等
令和5年11月14日 (火)	【内容】 10月に県外視察を実施した分身ロボットによる接客体験の報告研修として実施した。 【成果と課題】 ・研修実施前は、遠隔で実際に人間が操作している分身ロボットカフェと、近年レストラン等で導入されているロボットの違いが分からない様子が見られた。しかし実際の接客場面の動画等も活用して報告したことで、AIと操作で動く違いに気づくとともに、操作性を理解することで操縦者を生徒に置き換えてより具体的なイメージをもつことができた。 ・知的障害のある人が在宅ワークや遠隔操作により外とつながって仕事をしているという企業ともつながることができれば、より進路の可能性が広がるので、知的障害の方対象の操作の習得方法の研修やオンラインでのコミュニケーションの取り方の研修があれば教員のスキルアップにつながると考えられる。 【教員の感想】 ・肢体不自由の生徒だけでなく、知的障害や発達障害の生徒で、不登校の生徒にとっても進路選択の一つになれば良いと考える。 ・「接客業」のイメージを、教員自身もアップデートする必要がある。



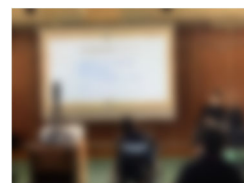
(研修の様子)

※兵庫県立播磨特別支援学校は、「進路学習会」として、生徒、保護者と対象者を拡大して実施。以下、(才)を参照。

(オ) 先輩卒業生による、「進路学習会」※県立播磨特別支援学校で実施

在宅就労している卒業生を講師として、母校の進路学習会で講演及び保護者も交えた座談会を開催し、在校生や保護者の不安解消や就職に向けた意欲を向上させる。

実施時期	内容等
令和6年2月2日 (金)	【開催場所】 兵庫県立播磨特別支援学校 【参加者】 兵庫県立播磨特別支援学校高等部生徒及び保護者（保護者は希望者のみ）及び教員 計約40名 【講師】 兵庫県立播磨特別支援学校卒業生（現スタッフサービス・クラウドワーク社員）及び保護者 スタッフサービス・クラウドワーク近畿エリア担当者2名 【講演内容】※本人より ・現在の仕事について、就労するまでの道のり、やりがい等 【座談会内容】※在校生＆本人／企業担当者＆保護者に分かれて実施 ・在学中に学習しておいた方がよいこと、1日の過ごし方など ・在宅ワークにおける社員研修等の方法について ・（企業から）実際の仕事内容について等



(カ) 企業と協力した障害者理解啓発ポスターの作成

検討委員会で協議した内容を基に、特別支援教育をより多くの方々に知ってもらい、身近なことから関わりを広げていけるようなポスターを作成する（令和6年3月完成）。

(4) 成果

令和5年度取組について、以下3点を成果として記載し、各課題及び具体的方策を（5）に記載する。

ア 企業等と連携したICTを活用した取組

令和5年度は、企業と連携を図る中でも、卒業後の新しい働き方として今後選択肢の一つになる可能性がある「在宅就労」での仕事体験が中心となった。

これまで卒業後の選択肢として「就労」を希望する場合、基本的には自宅から職場に通勤が可能であるかどうか大きな判断基準となっており、中には就きたい仕事があるが、自宅から毎日通勤することが困難である、又は、自宅から通勤可能な範囲内に適切な職場がない、といった理由から企業就労を断念したり、福祉就労に切替えたりをせざるを得ない事例もあった。しかし「在宅で働く」という新たな働き方があり、実際に在宅でも充分社会とつながりを持って生活していることを教員や保護者が知ること



ができたことが成果として挙げられる。また、在宅就労の場合は孤独感等の解消にも配慮し、社員同士のオンラインミーティングや雑談タイムを設置する等、パソコン等機器の操作はもちろん、ミーティング時の表情にも留意する必要があること、またその内容は在宅、通勤を問わず社会生活において必要な内容であることも分かり、教員にとっては各校での授業における指導内容の振り返りや授業の工夫について示唆を得ることができた。

イ 生徒が「なりたい自分」になるための指導

令和5年度は、研究指定校3校を対象として、プレゼンテーションソフトを使用し、自分自身が学校で学んだことや将来の夢を自分の言葉で発表する「キャリア教育甲子園（仮称）」をプレ開催した。当課の「キャリア教育・就労支援等研究協議会」（会場集合とオンラインのハイブリッド形式で開催）内で実施することで、県立特別支援学校関係者だけでなく、市町組合教育委員会の担当者、中学校の特別支援学級の担任、障害者就業・生活支援センター職員、労働局関係者等非常に多くの方々に発表を聞いていただき、チャットで感想等も含め即時評価してもらったことが生徒や指導した教員にとって大きな成果である。



ウ 特別支援教育に関する理解啓発ポスター作成

検討会議において、特別支援に関する取組や、更なる理解啓発を進めるための取組として、ポスターの作成を提案し、内容について様々な立場の方々と交え協議を行うことができた。令和5年度は協議内容を参考に特別支援学校の取組を端的な言葉で表現し、在籍している生徒の生き生きとした表情を素材にし、すぐに情報にアクセスできるようQRコードも添えたポスターを作成することができた。令和6年度は県内の特別支援学校等にも協力を仰ぎ、駅等の公共施設を中心に掲示予定である。



(5) 課題と対応方策

ア 企業等と連携したICTを活用した取組

在宅就労を推進している企業は、現時点では病気や肢体不自由により外出して通勤が困難な人が対象であることが多く、本県で最も在籍者数の多い知的障害の特別支援学校の場合は、体験的な学びの方が知識の習得がしやすい実態がある。また、知的障害の程度が非常に多岐にわたるといった障害特性等から、通勤型の雇用が中心となりやすく、進路選択の広がりが一部の生徒に限られてしまう可能性があることが課題として挙げられる。

そのため、今後も様々な発達段階や障害特性に応じたICTを活用した取組については、スキルの向上だけでなく、SNSを介したコミュニケーションの取り方や情報モラルに関する教育も含めた「ICTと上手く付き合い、自分のやりたい事や思いを伝えられる」ような児童生徒を育成できるように、企業等と連携して取組を進める必要がある。

イ 生徒が「なりたい自分」になるための指導

今回は視聴対象や時間に限りがあり、結果的に視聴者が大人のみになったため、次年度は他の生徒も実際に見学等による参加ができるような開催や周知の方法を工夫する必要がある。

また、生徒が自分のことや夢等を周囲に表明するために、今回のプレ開催ではプレゼンテーションソフトを活用したが、次年度は研究指定校に視覚・聴覚特別支援学校を加える予定であることから、より多様な手段によるICT活用の取組について研究を進める。

ウ 特別支援教育に関する理解啓発のより一層の推進

特別支援教育をまず「知ってもらう」ことを目的に作成したポスターからQRコードを読み込んだ先（現在は本県特別支援教育課のホームページ）のコンテンツを更に充実させること、次年度は各校の小～高等部のキャリア教育に関する取組、ICTを活用した指導の好事例等を集約し、リーフレット（デジタル版予定）を作成することで、関係者以外にも取組を広く周知していく。